

# 戦国武将の千句連歌

—明智光秀の五吟一日千句を中心に—

鶴崎裕雄

## 一 千句連歌

連歌は常に宗教的である。本稿で述べる千句連歌は特に宗教的色彩が濃い。現在行われている古来の連歌を継承しようとする本式的な連歌は、昭和五十六年十一月福岡県行橋市の須佐神社で行われた法楽連歌シンポジウムを契機に復活した。須佐神社では室町時代より続く夏祭りに連歌が行われ、明治以降の連歌衰退期にも祭礼の行事として行われていたので、当時の高辻安親宮司の企画でシンポジウムが行われたのである<sup>①</sup>。

昭和六十二年五月、大阪市の杭全神社（藤江正謹宮司）で浜千代清氏・島津忠夫氏を中心に月次連歌が復興した。平成元年四月、京都市の日本文化研究センターで光田和伸氏によって連歌研究会が催され、これを機に本式的な連歌による京都連歌の

会が発足し、毎年、二月と十一月には北野天満宮で梅ヶ枝連歌

・紅葉連歌、四月には東寺の花の下連歌はなの下が行われている。

以後、北は山形県の高畠・茨城県の高河、南は熊本県の八代など全国的に連歌会が行われるようになった<sup>②</sup>。

現行の連歌は四十四句を連ねる世古形式の連歌であるが、本来、中世以来の連歌の基本は百句連ねる百韻連歌であり、戦勝や築城などの慶事や、年忌や追悼などの弔事には百韻を十卷連ねた千句連歌が行われ、社寺に奉納されることが多かった。

昭和五十三年から昭和六十三年にかけて奥田勲氏・島津忠夫氏によって古典文庫から以下のような『千句連歌集』八冊が刊行され、代表的な千句連歌を見るのにまことに便利である。

一文和千句文和四年（一三五五）五月救済きゆうぜい・御・永運えいぎん・周阿しゅうあら  
紫野千句 応安三年（一二七〇）夏までか。救済・成阿じょうあ・周

阿ら

初瀬千句 享徳二年（一四五三）頃 春北畠教具・宗砌・日晟ら

二文安月千句 文安二年（一四四五）八月 宗砌・日晟・専順ら

文安雪千句 文安二年冬 行助・能阿・智蘊・宗砌ら

顯証院会千句 宝徳元年（一四四九）八月 忍誓・宗砌・専順ら

三宝徳四年千句 宝徳四年 宗砌・賢盛・専順・日晟ら

享徳千句（小鴨千句）をかもせんく 享徳二年（一四五二）小鴨之基（山名  
家臣）・宗砌ら

異体千句 康正二年（一四五六）源意独吟。源氏国名など賦物

四美濃千句 文明四年（一四七二）革手城興行、専順・宗祇・

紹永

因幡千句 文明七年 専順・覚阿・宗春（兼載）・紹永ら

表佐千句 文明七年 専順・覚阿・宗春（兼載）・紹永ら

五熊野千句 寛正五年（一四六四）勝元・盛長・心敬・専順・

宗祇ら

川越千句 文明二年 太田道真・心敬・宗祇・鈴木長敏

三島千句 永正元年（一五〇四）今川氏親関東戦勝を宗長独吟

六葉守千句 長享元年（一四八七）種玉庵で宗祇・肖柏・宗友

・宗長

名所千句 成立・作者未詳 宗鱗の独吟か

東山千句 永正十五年（一五一八）能勢頼豊追悼。実隆・宗

長ら

七伊庭千句 大永四年（一五二四）種村貞和依頼 実隆・宗碩・

宗長

永原千句 明応五年（一四九六）永原吉綱・宗祇・兼載・紹

永ら

池田千句 永正六年（一五〇九）？肖柏・玄清・宗碩（十花

千句）

八飯盛千句 永禄四年（一五六二）三好長慶主催 宗養・紹巴・

玄哉ら

大原野千句 元亀二年（一五七二）幽斎主催 道澄・実澄・紹

巴ら

高野千句 元和元年（一六一五）昌琢・昌俣・玄陳・玄的・

寛佐ら

## 二 公家の和歌・武士の連歌

一般的に公家は和歌を、武士は連歌を好む傾向にある。連歌師宗長の著書といわれる『連歌比況集』（小学館日本古典文学全集）の「城攻め・合戦」の項は、武士と連歌を結ぶ象徴的な

連歌論である。宗長は若年、今川義忠に仕え、実戦に従軍した経験があったので、武士の戦場で得た連歌論といえる。

#### 城攻め・合戦

連歌と歌との難易を申さば、歌は題を取りて起き臥して案じ、また抄物をも見合はせて詠む物なり。連歌は列座して、人の句に我付け、我が句に人付くる物なれば、物を見るにも及ばず。油断しては不可叶物なり。たとへば、歌は城攻めをせんがごとし。城の切岸へ付きて返り、壁尺の木などを結びて、物の具脱ぎ置きて、折を待ちて攻むる物なり。連歌は打ち出でて合戦するがごとし。難易この中にあり。よくよく工夫すべし。

戦国時代、連歌師たちは各地の豪族に招かれて旅を続けた。その時々、連歌会や発句が句集(宗祇の『老葉』や『下草』など)や紀行(宗長の『宗長手記』や宗牧の『東国紀行』など)に記されている。中でも千句連歌に注目したい。

文明十七年(一四八五)春、摂津の国人領主、能勢頼則・池田正種・伊丹元親・塩川秀満らが、摂津守護細川政元の発句(第一の百韻発句)を得て千句連歌を興行した。「於新住吉御千句」とあるので住吉明神を勧進した連歌であろう。摂津の国人領主たちは守護細川政元の被官であった。(於新住吉御千句発句脇

#### 第三 大阪天満宮。

長享二年(一四八八)三月に、同じく摂津の国人領主が守護細川政元の発句で「於摂州千句」を興行している。その第二の百韻の発句は宗祇の作で、『下草』(初編)に、

能勢頼則許にて侍し拙句に

花やあらぬおもひかへせは世々の春  
とある。

『宗長手記下』に大永二年(二五二二)、管領細川高国に依頼されて連歌師の宗長と宗碩が伊勢神宮に「伊勢千句」を奉納する記事が見える。これには、

此千句の事、今の管領高国江州より御入洛の刻、御法楽として立願申せし事也。

とある。高国が都を追われることがあって、近江から上洛する時(永正四年(一五〇七)・五年、または永正十七年の政変の頃か)、伊勢神宮に祈願した。その奉納連歌を宗長に頼んだのである。<sup>(4)</sup>

天文十三年(一五四四)、宗牧は『東国紀行』の白河の関一見の旅に出た。途中、三河の西郡(愛知県蒲郡市)で国人領主、鶴殿氏と松平氏の千句連歌に出座した。紀伊国出身の鶴殿氏と三河に勢力を持つ松平氏がともに支配する西郡の千句である。<sup>(5)</sup>

武士の共同統治を象徴するような千句連歌である。

### 三 三好長慶の千句

現在、三好長慶の千句連歌は三作品が知られている。一は天文二十年（一五五二）六月の「天文三好千句」、二は弘治二年（一五五六）七月の「瀧山千句」、三は永祿四年（一五六一）五月の「飯盛千句」である。この内、「瀧山千句」は撰津の瀧山城での千句で、発句には次のように撰津の名所（歌枕）が詠み込まれている。

- 第一発句 難波津の言の葉おほふ霞哉 長慶
- 第二発句 住吉といふ名にめてよ帰る雁 宗養
- 第三発句 花そちる山には春や水瀨川 為清
- 第四発句 ぬきとめぬ玉江の波か飛ぶ蛭 玄哉
- 第五発句 湊川夕塩こえて夏もなし 範与西園寺主
- 第六発句 みしやいつ今朝初島の霧間哉 快玉兵庫久澤
- 第七発句 水しや須磨の月こそ夜の海 正秀
- 第八発句 鹿の音や生田の沖の山嵐 元理
- 第九発句 舎りせよ浦は蘆の屋初時雨 等恵
- 第十発句 布引のはたはり広し雪の瀧 宗養松増久代

三つ目の「飯盛千句」は長慶の最後の居城となった飯盛城（大阪府大東市）での千句で、各発句には次のように五畿内の名所と夏の月が詠み込まれている。

- 第一発句 汲わすれくみしる月や石清水 長慶
  - 第二発句 木間もる月影幾重氷室山 宗養
  - 第三発句 春日野のとふ火や螢夕月夜 為清
  - 第四発句 茂る木に月やこもりくの初せ風 元理
  - 第五発句 夏の夜の月や水尾行天河 玄哉
  - 第六発句 月残るかた野や行多郭公ほしむす子 直識
  - 第七発句 在明や花も待らん五月山 淳世
  - 第八発句 影涼し月や堀江の玉柏 紹巴
  - 第九発句 月出て夏やししの田の森の露 快玉
  - 第十発句 こぬ秋や月にふけ井の沖津風 一舟
- このように「瀧山千句」と「飯盛千句」の発句に詠まれた名所は撰津国から五畿内へと長慶の勢力拡大の意識が窺われ、千句に賭ける長慶の願望が窺われる。<sup>(6)</sup>

### 四 天下人、信長・秀吉・家康の連歌

三好長慶は連歌好きのトップといえよう。「猿の草紙」に、

当時の先達なれば宗養召下さばやと思へども、河内の飯盛へ下向のよし聞及間……

とあって、連歌師宗養がいつも長慶の許に呼び出されていたかのようにある。長慶連歌には、一流の連歌師を招いて両吟・三吟など少数の連衆と連歌を楽しむ傾向が見られる。また『三好別記』などの軍記には、弟の戦死を知らされても、「葦間にまじる薄一村」という前句に「古沼の浅き方より野となりて」という句を付けて連衆を感じさせた話が載る。

これに対し織田信長は舞の幸若を好むことは有名だが、和歌・連歌には無関心であった。むしろ家臣たち、細川藤孝や明智光秀などが熱心であった。天正年間には、後に茶の湯で名高い古田重然（織部）が紹巴・昌叱の許に出入りしていた記録がある。<sup>⑦</sup>

豊臣秀吉には天正六年（一五七八）五月に、毛利攻めの戦勝祈願をした「羽柴千句」がある。さらに関白就任以後、秀吉の連歌は目立って多くなり、特に秀吉の発句が多く、一座中の句数も多い。一座中、まさに天下を占めるといった感がある。文禄三年（一五九四）三月、秀吉の母大政所の三回忌が高野山で営まれ、「高野参詣百韻」には家康や細川幽斎・蒲生氏郷、連歌師紹巴・昌叱らが名を連ねた。<sup>⑧</sup>慶長元年（一五九六）十二月、

慶長の役の朝鮮出兵の前にして秀吉の「夢想歌」を発句・脇に住吉明神へ奉納連歌が行われた。これらは千句連歌ではないが、秀吉の連歌として注目すべき作品である。

徳川家康の連歌作品は、信長と同様に少ない。前掲の「高野参詣百韻」のほか、慶長四年（一五九九）二月、一族の女性の夢想連歌を発句に、家康の一族男女一七人が一堂に会し、一巡の後、保科正直・天野康景ら近臣が満尾する百韻であるが、関ヶ原合戦の一年半前、伏見城での張行か。存疑の作品である。家康は和歌や連歌には関心を持たなかった。<sup>⑨</sup>

## 五 明智光秀と細川藤孝の連歌一覽

令和二年度のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」は「時はいま天が下しる五月哉」で名高い明智光秀が主人公である。本稿もこれを機会に光秀連歌を纏めようとしたのが執筆の発端である。前述のように光秀も藤孝も連歌に熱心であった。現存する二人の連歌作品の写本を一覧にまとめて比較してみた。信長が光秀・藤孝を従え、足利義昭を擁立して上洛した永禄十一年（一五六八）から本能寺の変の天正十年（一五八二）の十五年間である。一覽をまとめるのに明治書院の『連歌総目録』（平9）

と国文学研究資料館データベースを参照した。一覧の記載順は年月日、発句、連衆、「」に写本の所在する図書館、神社などを記した。

なお天正三年（一五七五）七月、光秀は惟任の姓を名乗って「惟任日向守」と呼ばれ、藤孝も同じ頃より居城のある長岡の姓を名乗って「長岡兵部大輔」と呼ばれるが、本稿では「明智光秀」「細川藤孝」で記す。

#### 光秀の連歌作品

- ①永禄111115 「雲に月光隔てぬ霞哉」（石筆明徳） 良政・藤孝・白・紹孝・白・紹巴・清誉上人・昌叱・雅敦・心前・玄哉・光秀ら  
〔大阪天満〕
- ②元亀元321 「朝な朝な立ち枝かたふく柳哉」勝長・紹巴・藤孝・昌叱・心前・賢盛・光秀ら「天理」
- ③天正2124 「梅柳香も色もおし今朝の雪」紹巴・光秀・江（三位）・里計・永純「天理」
- ④天正2126 「立ちかへは霞をうつせ宮柱」光秀・覚祐・紹巴・江（三位）・永純・宗治ほか「大阪天満・天理」
- ⑤天正274 「真木の板の継橋白し夕月夜」（古山徳徳）（宇治橋造）紹巴・直政・藤孝・光秀・昌叱・心前・重然ら「熊本八代」

⑥天正2閏112 「大船の雪に静けき堀江哉」（船中之御参会） 藤孝・光秀・紹巴・昌叱・心前ら「大阪天満」

⑦天正546 「山たかみ越きてちかし郭公」（第五11千句のつか） 英怙・紹巴・宥源・宗及・光秀・兼如・藤孝・行祐・昌叱・心前・祐円ら（宥若西坊）「内閣文庫 賜蘆拾葉24」

⑧天正6310 「花盛さらば雲井の軒端哉」白・光秀・藤孝・紹巴・昌叱・英怙・利三・兼如・光慶ら（高橋しんみ）「国会」

⑨天正8123 「解渡る氷に深し谷の声」紹巴・光秀・心前・利三・行祐・昌叱・宥源・光慶ら「河野記念館」

⑩天正91119 「五吟一日千句」降る雪に花咲き草の軒端哉」光秀・秀就・心前・紹巴・昌叱・能閑（執筆）「大阪天満」

⑪天正1019 「ざざれ石の巖に契れ花の春」光秀・藤孝・紹巴・昌叱・秀仍・利三・宗及・光慶ら「書陵部」

⑫天正10524 「時は今雨が下しる五月哉」光秀・行祐・紹巴・宥源・昌叱・心前・兼如・行澄・光慶「大阪天満」

#### 藤孝の連歌作品

- ①永禄111115 「雲に月光隔てぬ霞哉」良政・藤孝・白・紹巴・清誉上人・昌叱・雅敦・心前・玄哉・光秀ら「大阪天満」（光秀①）

② 永祿12 2 5 「なびく世やよのくにまての春霞」宰相中将・聖護院(白)・右大将・大覚寺・藤孝・紹巴ら「早稲田伊地知文庫」

③ 永祿12 8 7 「波しろしきりやのほりせ朝嵐」(三吟)紹巴・藤孝・昌叱・宗及(執筆)「大阪天満・書陵部・国会連歌合集」

④ 元亀元 2 3 「水とりも春に陰ふむ柳哉」白・紹巴・藤孝・清誉・雅敦・昌叱・心前・玄哉ら「早稲田伊地知文庫」

⑤ 元亀元 2 22 「した露に花の香うくる袂哉」(第八)↓千句  
藤孝・信堅・昌叱・心前・禪興ら「大阪天満」

⑥ 元亀元 2 22 「目かれせぬ心を花のねさし哉」聖護院・禪永・藤孝・大覚寺・紹巴・禪興・雅敦・昌叱・心前ら「国会連歌合集」

⑦ 元亀元 3 21 「朝な朝なたち枝かたふく柳哉」勝長・紹巴・藤孝・昌叱・龍三・心前・賢盛・光秀ら「天理」(光秀②)

⑧ 元亀元 11 23 「冬ながら枝葉を見する木め哉」紹巴・求政・藤孝・昌叱・心前・秋共・宗及ら「京大国文学」

⑨ 元亀 2 1 3 「年こえて又あら玉のひかり哉」禪興・紹巴・雅敦・藤孝・慶典・昌叱・禅元・禅永・心前・玄哉ら「筑波大北野」

⑩ 元亀 2 1 18 「雪に梅むもれ木ならぬ句哉」白・紹巴・三大・

芳溪・藤孝・雅敦・昌叱・心前・玄哉・英怙ら「京大平松」  
⑪ 元亀 2 2 5 ↓ 7 「大原野千句」白・藤孝・雅敦・昌叱・紹巴  
(飛騨守)  
・玄哉・心前・三大・英怙・了玄・英怙・宗仍ら「天理・大阪天満・国会連歌合集・大阪大土橋」

⑫ 元亀 2 4 16 「子規ころのまつをやとりかな」(和漢)藤孝・策彦・秋(高僧)・慶典・紹巴・昌叱・心前ら「曼殊院目録」

⑬ 元亀 2 8 6 「秋風の身を分て入袂かな」肥後御舟林中務少輔・紹巴・守信・藤孝・昌叱・雅敦・心前・英怙ら「内閣・天理」

⑭ 元亀 3 9 28 「とめゆけは紅葉の中の山路哉」紹巴・藤英・藤孝・雅敦・昌叱・心前・重然ら「天理・内閣」

この年(元亀三年)、藤孝は紹巴より『源氏物語』講釈、十二月より実枝より古今集講釈(古今伝受)を受ける。

⑮ 天正元 1 9 ↓ 11 『嵯峨千句』秋・藤孝・芳漢・了玄・昌叱・快典・芳漢・慶典・玉蓮・玄哉・英怙・紹巴・心前ら「大阪天満・太宰府」

⑯ 天正元 4 26 「勇とてかへなん宿かほとときす」紹巴・宥松・藤孝・昌叱・秋共・心前・直政・宗臨ら「大阪天満」

⑰ 天正元 6 5 「はなの時も風をやまたん夕涼み」(両吟)藤孝・紹巴。「天理・書陵部・国会連歌合集・大阪天満」

⑱ 天正 2 5 \* 「岩根まつや木高かれや夏の庭」紹巴・昌叱・心

前・藤 孝・雅教・勝長・英怙・禪永・了玄・宗及ら「大阪天満」

①9 天正2 6 23 「涼しさもうかふこころのいつみ哉」藤孝・昌叱・雅教・紹巴・玄哉・心前・宗及・英怙・兼閑ら「九大細川」

②0 天正2 7 4 「真木の板の継橋白し夕月夜」(宇治橋造管) 紹巴・直政・藤孝・光秀・昌叱・心前・重然ら「熊本八代」(光秀⑤)

②1 天正2 閏11 2 「大舟の雪に静けき堀江哉」(船中之御参会) 藤孝・光秀・紹巴・昌叱・心前・英怙・宗及ら「大阪天満」(光秀⑥)

②2 天正3 5 1 「あさつく日さす方ぬるる若葉哉」紹巴・妙治・藤孝・昌叱・心前・英怙・宗及・紹閑・文閑ら「大阪天満」

②3 天正4 1 12 「梅かかにふれぬ袖なき野風哉」(五吟) 白・藤孝・紹巴・昌叱・心前「書陵部・国会連歌合集」

②4 天正4 2 3 「あけまさや柳のいとを春のかせ」紹巴・正繁・藤孝・昌叱・心前・英怙・宗及・了玄ら「早稲田大」

②5 天正4 12 11 「鴛の声きかさねけり小夜枕」(長岡与十郎殿御方新造) 紹巴・藤孝・昌叱・秋共・心前ら「大阪天満」

②6 天正5 4 6 「山高み越きて近し郭公」(第五) ↓千句か) 英怙・紹巴・宥源・宗及・光秀・藤孝・行祐・昌叱ら「内閣

賜蘆拾葉」(光秀⑦)

②7 天正6 3 10 「花盛さらば雲井の軒端哉」白・光秀・藤孝・紹巴・昌叱・英怙・求政・利三・兼如・光慶ら「国会連歌合集」(光秀⑧)

②8 天正6 4 24 「さそふ水に任する風の螢哉」元倡・玄旨・栄祐・継春・栄延・但阿(玄旨の名乗)存疑「天理」

②9 天正6 8 25 「立鳴も月をにこさぬ汀哉」紹巴・藤孝・玄以・昌叱・宗波・心前・宗及・重然ら「天理・東大国文」

③0 天正7 1 16 「もしほ草かくあと絶ぬ霞哉」(四吟、定家色紙入手開き) 昌叱・藤孝・紹巴・心前「天理・早稲田伊地知・九大細川」

③1 天正8 4 22 「夏山や滴はにえて音もなし」(和漢) 紹巴・雄・靈三・藤孝・周隣・昌叱・心前・宗及・友益「叡山」

③2 天正9 3 16 「霞つつ有明にあさの夜はもかな」紹巴・藤孝・昌叱・心前・文閑・宗及ら「天理・九大細川・国会連歌合集」

③3 天正10 1 5 「なひきそはん行ゑみえけり春霞」紹巴・藤孝・日中・昌叱・鳥中・左大弁・永孝・了任「国会連歌合集」

③4 天正10 1 9 「さされ石の巖にちきれ花の春」光秀・藤孝・紹巴・昌叱・秀仍・利三・秀就・光慶ら「書陵部」(光秀⑩)

③5 天正10 7 15 「墨そめのゆふへやなこり袖の露」(信長公追悼)

藤孝・白・紹巴・昌叱・心前・兼如・紹与ら「大阪天満・天理」

## 六 連歌一覽に見る光秀と藤孝

右の連歌一覽から光秀と藤孝の連歌を比較してみると、次のようなことが判る。

I 同時期の光秀は十二作品、藤孝は三十五作品である。

II 両者が同座するのは、永祿11115（光秀①藤孝①）・元龜

元321（光秀②藤孝⑦）・天正274（光秀⑤藤孝⑳）・天

正2閏112（光秀⑥藤孝⑳）・天正546（光秀⑦藤孝⑳）

・天正6310（光秀⑧藤孝⑳）・天正1019（光秀⑪藤孝⑳）

の七作品である。

III 千句については、光秀は⑩『五吟一日千句』、⑦『第五』

とあるので千句か。藤孝は⑪『大原野千句』、⑮『嵯峨千句』、

⑤「第八」とあるので千句か。

IV 藤孝には⑫⑬漢和聯句（和漢）がある。

V 藤孝は公卿や門跡の連歌に出座が多い。②・⑥・⑪『大原

野千句』などが公卿や門跡との連歌である。

VI 藤孝は北野天満宮関係の連歌に出座している。禪興の⑥・

⑨など「禪…」の連歌作者は北野天満宮の連歌に多い連衆名

である。IV・V・VIの出座は藤孝がプロの連歌師並みといつてもよい活躍振りである。

VII 藤孝は両吟⑰・三吟⑳・四吟㉑・五吟㉒がある。これは既述の長慶の連歌の特色とよく似ている。少数の連衆で連歌を樂しむ傾向である。

VIII 光秀の⑤、藤孝の⑳は宇治橋造営の百韻。脇の原田（塙）直政は信長家臣、山城の分国守護、光秀も藤孝も山城国統治に関係している（『織田信長家臣人名辞典』）。

IX 藤孝は合戦の際に古今伝受や『源氏物語』など古典の講釈を受けている。例えば、元龜三年には紹巴より『源氏物語』講釈を聴き、十二月からは三条西実枝より古今集講釈（古今伝受）を受けている。

## 七 茶会記に見る光秀と藤孝

光秀・藤孝の史料としては茶会記も有効な史料である。津田宗及の茶会記『天王寺屋会記』には宗及が招いた自会記と客として招かれた他会記がある。天正九年（一五八一）四月、光秀と藤孝は光秀の所領の丹波と藤孝の所領丹後へ互いに招き合つて天橋立を飾り船で遊覧し、文珠堂に参詣した。この旅行に連

歌師の紹巴と茶の湯の宗及が同行した。その時の茶会を書き留めた宗及の他会記である。<sup>(10)</sup>

<sup>(天正九年)</sup>

四月九日、丹波亀山ヨリ奥郡へ通申路次中<sup>(二)</sup>、方々振舞有之、

四月十日朝、福地山<sup>(包)</sup>にて明知弥平次殿之振舞、七五三

ノ膳也、

四月十一日朝、従福地山罷候也、

惟任殿御供申候、路次にて福寿院振て福寿院振舞、

茶屋ヲ立テ、生鮎・生鯉・鮎<sup>(泉)</sup>・鮎<sup>(水)</sup>せんすひを俄用意にて、魚共

をはなされ候、是モ七五三、色々様々<sup>(二)</sup>振舞也、

同四月十二日之朝、長岡与壹郎殿之振舞

一 御人数 惟任日向守殿父子三人

長岡兵部<sup>(非孝)</sup>太夫殿父子三人

紹巴 宗及<sup>(山上)</sup> 宗二<sup>(山上)</sup> 道是

本膳七ツ、二膳五ツ、三膳五ツ、四膳三ツ、五膳三ツ、引物二色、

以上七ツ、菓子むすひ花にてかさり、十一種也、

一 御酒半<sup>(三)</sup>、地藏行平之太刀、従与一郎殿日向殿へ御進上候也、

同日十二日之巳之刻<sup>(三)</sup>、九世戸へ見物、かさり船にて、

并橋立之文珠にて御振舞有之、

一 俄夕立之雨ふりて、

夕立のけふ<sup>(八)</sup>は八<sup>(七)</sup>やき切戸哉<sup>(尾)</sup> 兵部太夫殿藤孝

一 紹巴ト日向殿ト太夫殿ト連歌アリ、

九世戸之松ニなへ松といふ松也、就其ノ発句アリ、

うふるてふ松<sup>(甲)</sup>ハ千年のさなえ哉<sup>(甲)</sup> 光秀

夏山うつす水のみななみ<sup>(三)</sup> 藤孝

夕立のあとさりけなき月見へて 紹巴

同四月十四日朝<sup>(安土)</sup> 宮内法にて

同四月十五日<sup>(明智秀経)</sup> 堅田にて、明知半左衛門

同四月十七日、朝<sup>(ヨリ)</sup> 其夜留テ、紹巴振舞、

この旅行が象徴するように光秀と藤孝は親密に行動していた。永禄十一年（一五六八）、足利義昭を擁した信長の上洛も光秀・藤孝の画策によって成功した。上洛後、信長は京都の朝廷や公家との交渉を光秀と藤孝に任していた。二人は必要に応じて河内の畠山氏や摂津の大坂本願寺など、畿内周辺の合戦に出陣した。ところが天正三年（一五七五）京都の北西に隣接する丹波・丹後に信長の攻略が開始されると光秀と藤孝に出陣を任せた。丹波・丹後には朝廷や公家の荘園が存在していたからであろう。

同年十一月、丹波国多紀郡八上城（兵庫県篠山市）の波多野秀治とともに氷上郡黒井城（兵庫県丹波市）の赤井忠家（悪右衛門）を攻めた。しかし翌年天正四年正月、波多野秀治が信長

軍から離反したため、いったん丹波攻撃は休止した。五年、龜山城（京都府亀岡市）丹波侵攻の基地として築城を始め、七年二月本格的に丹波に進駐し、五月、氷上城（兵庫県丹波市）を落とす、六月、八上城の波多野秀治を降し、八月、黒井城の赤井忠家を降した。丹後も同じような侵攻で信長の支配地となり、光秀に丹波が、藤孝に丹後が所領として与えられたのである。天正九年四月の天橋立旅行はこうした光秀・藤孝の自領を巡る旅行であった。

## 八 光秀の千句連歌「五吟一日千句」のエネルギー

千句は三日間、初日三百、二日目四百、三日目三百。「一日千句」の例、『細川千句』文安年間～天文年間管領細川氏一族や家臣が五座に分かれ、二月二十五日天神忌に一日で二百韻、計千句連歌が奉納されていた。これは「二月廿五日一日千句」とも呼ばれた<sup>1)</sup>。他にも、近世の例であるが、元文二年（一七三七）十二月七日、大阪平野の豪商、末吉宗伴・末吉宗信・中瀬常興・奥野良弘の一日千句の例がある。原懐紙が大坂平野の杭全神社（大阪市平野区）に奉納されている。一日千句は制限時間内に多数の句を詠むことが最大の特徴であり、後の「西鶴大矢数」

などの原点になったものである。

時間制限なので、それなりの特徴がある。「五吟一日千句」の翻刻をざっと試みたが、その一つに、雨冠の文字の多い「降物」「聳物」の句材が多いことに気付いた。「連歌新式」に、

「聳物」霞・霧・雲・煙如此可隔三句物、聳物

「降物」天・露・霜・霰如此可隔三句物、降物

とある。十分な翻刻ではないが、雨冠の句が多いことについて、連歌実作に詳しい光田和伸氏から降物・聳物の句去は三句去りなので、時間制限の時には付けやすいのではないかという示唆を得た。試しに無作為に「五吟一日千句」の第五の初折表～二折裏の部分の翻刻して提示する。

### 第五 三字中略

くもらさぬ月は心のか、み哉

光秀

木葉かきやる秋の池水

昌叱

や、寒き流に風の吹落て

秀就

暮果ぬれは螢すくなき

紹巴

分かへる竹の下道末遠み

心前

いく村かけていそく旅人

秀

山は雲狩衣にや重ぬらん

叱

（聳）

（句材）

岑よりみねにたとり行袖

<sup>ッ</sup>あらしたる畑もさすかに跡有て

爰かしこなる陰の松かき

みしは皆うつろひ果る古里に

雪のあはれをおしむ一年

みよし野やいつかは又も分なまし

とひ捨かへる隠家の友

いにしへの事かたらなん子規

名はき、なからへたゝりて行

まめ人は誰に契の中ならん

我ことくなる恨やはある

ことのはの花咲をのみ羨て

思ふも遠し九重の春

行月のかけや霞のこめぬらん

うかひて高き波のあは嶋

<sup>ニオ</sup>みつ汐に釣する舟の誘はれて

袖絶々のあしはらの道

秋霧や田面の末にまよふらん

妻にをくるゝさをしかの声

野分せし色にかた／＼分侘て

就

巴

前

秀

叱

就

巴

前

秀

叱

就

巴

前

秀

叱

前

巴

就

前

秀

(降)

みたれ臥たる露の竹垣

降つもる雪かと思れは夜半の月

真砂地かけて明わたるそら

跡先に汀の雁の立別れ

霞へたつる舟仄かなり

青柳の中に遠よる春の浪

末は外面につゝ藤かえ

夏来ても砌のこてふ去やらす

<sup>ニッ</sup>雨の名こりの露の閑けさ

そよめける竹の末葉も霧こめて

向ひ更せる月の山のは

打かたる今宵のほとこのいか斗

新手枕はあくる度々

恥かはす心深さをうらみ侘

文のかへしはたか筆の跡

いはけなきけはひはきくもあやしきに

立よるかたは小柴ゆふ陰

所々休らひかちに伴ひて

虫のねしたふ裾野はるけし

そことなく月に枕や定まし

叱

巴

前

秀

叱

巴

前

秀

叱

就

巴

前

秀

叱

前

巴

就

前

巴

(降)

(降)

(降)

(降)

(降)

(降)

(降)

(降)

なひき合たる道の色草

叱

花ふさは風のまに／＼落添て

前

春の行ゑそ水の儘なる

秀

連衆は光秀の他、紹巴・昌叱・心前という当時超一流の連歌師であり、秀就は光秀の家臣か明智一族の一人で、光秀の目に適った連歌上手の者であつたと思われる。何しろ選ばれた連歌上手による「五吟一日千句」であつた。これには光秀の連歌へのエネルギーを感じる。と同時に、私は藤孝への競争心を感じるのである。

## 九 本能寺の変と「愛宕百韻」

本能寺の変について、野望説・怨恨説・朝廷の関与・黒幕説・義昭の関与・黒幕説などが挙げられる。江戸中期の随筆『常山紀談』『三暎庵随筆』などでは、「天が下なる」か「天が下知るか、解釈も喧々囂々である。「愛宕百韻」については別の機会に論じたいので本稿では差し控えるが、私見を少し述べる。と、光秀は「愛宕百韻」の張行中に、信長への失望・怨恨・恐怖が徐々に沸き起こり、十分な準備期間もないままに信長襲撃

を執行したのではないかと推測する。突然の執行ゆえ、同調者もなく山崎合戦の敗北となつたと考える。考察の理由は述べることはできるが、光秀の脳裏まで立ち入ることはできない。永遠の謎であるが、稿を改めて、連歌の宗教性と光秀の連歌について論じてみたい。

なお本稿は、令和元年十月二十七日、聖心女子大学で行われた俳文学会大会での発表に基づく。研究発表でご意見をいただいた方々、大会運営でお世話になつた方々に感謝申し上げます。

### 〔注〕

- (1) 鶴崎裕雄「連歌復興現代史 昭和五十六年～平成二十二年」『平野法楽連歌』和泉書院 平24。山村規子「現代連歌復興活動の歴史(一九八〇～二〇一六)」小村典史『連歌にチャレンジ!』大阪教育大学附属平野中学校 平31。
- (2) 同右。
- (3) 「連歌比況集」小学館日本古典文学全集『連歌論集 能楽論集 俳論集』小学館 平13。
- (4) 鶴崎裕雄「伊勢山田における連歌師宗長」島津忠夫先生古稀記念論集『日本文学史論』世界思想社 平9。
- (5) 鶴崎裕雄「西郡千句」と三河西郡衆」『戦国の権力と寄

合の文芸』和泉書院昭63。

(6) 鶴崎裕雄「三好長慶の連歌」今谷明・天野忠幸監修『三好長慶』宮帯出版社平25。

(7) 鶴崎裕雄「古田織部の連歌と茶の湯」『茶の湯文化学』23 茶の湯文化学会 平27・3。

(8) 『和歌山県史 中世』和歌山県平成6。

(9) 鶴崎裕雄「天下人の和歌・連歌」『文化科学研究』30 中京大学文化科学研究所 平31。

(10) 『茶道古典全書』第七卷 淡交社昭34。

(11) 鶴崎裕雄「細川千句」管領と細川氏「二月廿五日一日千句」(細川千句三つ物)と細川政元『戦国の権力と寄合の文芸』前掲。

(12) 谷口克広『検証本能寺の変』吉川弘文館平19。

(つるさき ひろお／帝塚山学院大学名誉教授)